

因果関係の 複雑さと うまく付き合う

林 侑輝 (はやし ゆうき)

何のためにそれを見るのか

前回は、事例を効果的に比較するための「ミルの方法」と呼ばれる考え方を紹介しました。これは、理科の授業で学んだ対照実験にも通じるロジックであり、前々回までに述べた質的比較分析(QCA)という手法の基礎でもあります。ただし、QCAは日常的に行うには煩雑すぎますし、ミルの方法には多くの制約がありました。今回は「一致法」の限界を指摘しましたが、もう一方の「差異法」では明快な答えが得られないこともあります。ですが、これらの方法を用いることで、より深掘りすべ

き論点を特定することはできません。さて、私たちは通常、因果関係を「ある現象が発生する条件」に関する法則性として理解していません。ただし社会現象の場合、どれだけ高い精度で過去の分析を行ったとしても、未来から不確実性を完全に除去することはできません。したがって、ここで必要とされているのは、「個別具体的な出来事集まり」から「ほどほどに一般化できる知識」を生み出すための方法なのです。こうした「あらゆる状況には通用しないけれど、応用に耐えうる程度には再現性がある因果法則」は「中範囲の理論」と呼ばれ、社会科学が追求しているのは(せいぜい)このレベルの法則性だと言えます。

以上のような理由から、ミルの方法やQCAでは、事例を「結果変数」と「条件変数」の組み合わせとして抽象的に捉えます。前回と同様、「商店街の活性化」に関する架空の例を用いて考えてみましょう。仮に「来客数が三年連続増加すれば成功」という基準で結果変数を定義すれば、個々の「事実」は成功例/失敗例というたつた二つの事例グループに振り分けられます。事例が出揃ったら、条件変数の候補を複数挙げ、やはり「Yes/No」で判別できる表現で定義します。振興策の内容に注目すれば、「小学校行事の受け入れ」「アートの活用」「SNSの活用」などが一例でしょう。こうして、個々の事例は「各変数を満たしているか否か」に関するパターン情報と化し、一貫性のある比較が可能になります(逆に、変数化されなかった側面は無視されるわけですから、変数のチョイスが非常に重要です)。事例に基づく分析は、しばしば「職人芸的」だと言われます。しかし、ほとんどの人は「事例分析職人」ではありません。目的を果たすためには、「私たちは何のためにこれらの事例を集め、観察しているのか?」をクリアに共有した状態で、考察を積み重ねていく必要があります。無機質なやり方に感じるかもしれませんが、やる気持ちは抑えて全体を俯瞰する段階を経ることで、「中範囲」の端っこが見えやすくなるはずです。

〈和歌山大学経済学部 講師 博士(経営学)〉

第120回 わだい浪切サロン オンライン版

和歌山大学・岸和田市地域連携事業

「令和時代のまちづくり戦略」

- 5年で空き店舗がゼロになった商店街 -

話題提供者 **足立 基浩氏**

和歌山大学副学長(地域連携推進)
経済学部教授
Kii-Plus プログラム オフィサー

オンラインによる開講!

日時**10月21日** 水 19:00
20:30

わだい浪切サロンオンライン版は、事前申込み制になっています。

申込方法やご視聴方法は、サテライトホームページにてご案内いたします。

岸和田サテライト 検索